

次号予告

特集	脳卒中患者のフォローアップ	
	脳卒中患者の在宅における車椅子使用度の調査	東京都心身障センター 高田 京子・他
	脳卒中患者の在宅における車椅子使用の調査	宮城県拓杏園 花村 都・他
	脳卒中後遺症者のフォローアップ（車椅子使用度と在宅者との関係）	神奈川リハビリセンター 子安 元子・他
	脳卒中患者の在宅における車椅子使用状況（特に住宅改造との関連について）	兵庫リハビリセンター 森本 栄・他
	脳卒中患者の退院後のフォローアップ	鹿教湯病院 望月 秀郎・他
	脳卒中患者のフォローアップ（当院におけるフォローアップシステム「療養相談会」の紹介）	川崎中央病院 秋田 裕・他
	片麻痺患者の退院後の生活状況	横浜市立友愛病院 嶋田 光祐・他
	視空間失認患者の在宅における ADL 状況	中伊豆リハビリセンター 前田 守
とびら	PT・OT を育てる教育	国療箱根病院付属リハ学院 伊原 幸枝
講座	痴呆 2. 老年期の痴呆性疾患	聖マリアンナ医大神経精神科 本間 昭
プロGRESS	骨形成促進への電気の利用	鹿児島大整外 酒 勾 崇

編集後記

読者の皆様、思い思いのお正月を迎えられましたでしょうか。本年もよろしく願いいたします。

さて本号は、シンポジウム形式で「チーム医療の人間関係」を取り上げました。

数年前、このシンポジウム参加者の奥川氏が会長をされているリハビリソーシャルワーク研究会学会にお邪魔した際、フォーク歌手をやめ、精神科医になられた北山修氏の「橋渡し」という講演を聴く機会がありました。氏はその中で何故マスコミから退いたかについて、マスコミのような一人対多数の関係の中では一方通行のコミュニケーションになり自分の言いたいことは正確には伝わらない。だから、あなたと私という、一対一の関係で治療できる精神科医を選んだと述べられました。その講演の後、会場の SW の人から、たとえ一対一の関係であっても真のコミュニケーションは保たれるのであろうか、SW をしていながら、言葉の空しさ、言葉の限界を感じざるを得ないとの感想が出て、北山氏自身もその意見に同感しつつ、それでも SW として諦めず、患者と他の専門職種、社会

との橋渡しをしてほしいと結ばれました。人と接し、話し合うことが専門ので SW さえ、いや、彼らだからこそ他者とのコミュニケーションの難しさを身にしみて感じられています。「チーム医療の人間関係」の特集を通して感じることも、各専門職種間のコミュニケーションの不足とその難しさということです。教育基盤、歴史的背景も違う専門職同志、十分な相互理解をするなど不可能ではないか、とやや悲観的な気持ちさえするのですが、しかし、自分の行っていること、考えていることを相手に伝え、納得してもらう努力を怠ってはいけないのではないかという気がします。

本誌8巻1・4・5・9号（チームの中での PT・OT）で提示されているチーム医療の問題点が10年後の今も解決されぬまま依然として残っていることを見るにつけ、新年にあたり、新たな気持ちでチーム医療のあり方について熟考戴けたらと思います。

今年からインタビュー＜PT・OTの素顔＞が、始まりました。どなたの素顔に迫りますか乞う御期待。（編集室）

<編集顧問>

天 児 民 和
九州労災病院名誉院長
五 味 重 春
埼玉県障害者リハビリセンター所長
砂 原 茂 一
国立療養所東京病院名誉院長
津 山 直 一
国立身体障害者リハビリセンター病院長
(五十音順、以下同じ)

<編集委員>

上 田 敏
東大リハビリ部
荻 島 秀 男
ペインリハビリテーションクリニック高島平整形外科
大喜多 潤
兵庫県リハビリセンター
寺 山 久美子
都心身障害者センター
富 岡 詔 子
信州大学医療技術短大
奈 良 勲
金沢大学医療技術短大
福 屋 靖 子
筑波大学
松 村 秩
都養育院リハビリ部

<編集同人>

池 松 洋 子
伊 東 元
岩 崎 テル子
宇都宮 初 夫
金 子 誠 喜
鎌 倉 矩 子
木 村 信 子
菊 地 延 子
小 嶋 裕
斎 藤 みち子
鈴 木 明 子
高 橋 正 明
田 口 順 子
橋 元 隆
古 川 宏
松 沢 博
宮 崎 和 子
宮 前 珠 子
山 田 貞 雄
矢 谷 令 子

(担当 細田・西塚)